

〈黄帝と老子〉雑観 第3回

『黄帝内経』はタオの医学書なのか？

『老子』 『莊子』そして『荀子』

『黄帝内経』 研究家 松田博公

ツイート 1

第1回 [黄帝は誰のことかと黄帝は言い 『黄帝内経』は天人合一の医書である](#)第2回 [『黄帝内経』は養生の書にあらず](#)

もう6年近く前になるが、シアトルで日本鍼灸をしているスティーブン・ブラウン氏が、遠路遙々、かの地の鍼灸師を伴い研修ツアーにやって来た時に、大森のホテルで討論会をした。WHOが指導する消毒法への疑問、日本鍼灸の固有性とTCMとの差異、RCT実験研究と臨床の違いなど、日本の学会、業界では、触らぬ神に祟りなしのように扱われている話題が次々と飛び出して、わたしも大いに自説を述べた。その中で、あるアメリカ人男性が、こう質問したのである。

「古典的な中国鍼灸に道教（タオイズム）が深く関係してきたのは明らかですが、道教と神道のあいだに何か関係がありますか」

神道の成立には仏教と道教が絡んでいる。それはさておき、わたしは中国鍼灸とタオイズム、つまりこの場合は老荘思想とを結びつけるアメリカの鍼灸師の認識に懐かしさを感じた。わたしも長くそう考え、そのことによって魂が救われる思いを味わってきたのである。

わたしは、20代半ばで『老子』『莊子』に出会い、世界をゼロから見直す視点を学んだ。やがて2度にわたり大病をする過程で、老荘の思想は中国医学に流れ込んでいるという考え方を知り、40歳で鍼灸学校夜間部の門を叩いた。そこで巡り逢った故伊藤真愚先生は、老荘思想に拠って『黄帝内経』を読んでいた。そのようにして、中国医学の古典『黄帝内経』と老荘思想とがリンクしているという観念は、わたしの中に深く錨を降ろしてきたのである。

何しろ、『黄帝内経』上古天真論篇の名文句「恬淡（てんたん）虚無な



今週号のPRの部屋はこちら

- 東京九鍼研究会／実践鍼灸講座 4月スタート
- 脱！ペーパー鍼灸師実践講座 特別体験セミナー (2014/4/13)
- 山元式新頭鍼療法（YNSA）セミナー (2014/5/3)

■近刊情報

- DVDで学ぶ 変形徒手矯正術～AZP理論に基づくその実技と臨床例～（出演：西村久代）

★ヒューマンワールドの本なら→→→→→ [こちら](#)

★ヒューマンワールドのDVDなら→→→→→ [こちら](#)

■投稿原稿募集

週刊『あはきワールド』では、研究レポート、論説、症例報告、エッセーなどの投稿

れば真気これに従い、精・神、内を守らば、病いずくんぞ従い来たらんや」は、『莊子』刻意篇の「平易恬淡なればすなわち憂患入る能わず、邪氣襲う能わず。静かにして陰と徳を同じくし、動いて陽と波を同じくして、天の理に従う」と重なる。『素問』至真要大論篇の「高き者はこれを抑え、ひくき者はこれを挙げ、余りあるはこれをくじき、足らざるはこれを補う」の補寫論は、『老子』77章の「天の道は、高き者はこれを抑え、ひくき者はこれを挙げ、余りある者はこれを損し、足らざる者はこれを補う」に基づくし、『素問』四氣調神大論篇の「聖人はすでに病むを治せずして、いまだ病まざるを治す。すでに乱れるを治せずして、いまだ乱れずを治す」は、『老子』64章の「いまだ乱れざるにこれを治す」を踏まえているだろう。このような引用関係はほかにも幾つかある。

けれど、いつのころからかわたしは、こうした文言から、『黄帝内経』は道家医学であるとするのは、表層的な印象にすぎないと考えようになっていた。だから、東洋思想に傾倒しているらしいそのアメリカ人鍼灸師に、こう答えたのである。



老子の図

「おっしゃるように、中国の鍼灸がタオイズムの影響を受けていることは事実ですが、それより儒教との関連性が強いのです。中国鍼灸は皇帝をはじめ、上層の人たちの医療だったから、国家秩序を維持するための儒教と結びついたのは当然です。中国医療はもっと道教的であれば面白かったんですね。我々がタオイズムの意識で医学古典を読み変えていけば、さらに豊かな鍼灸の世界が開かれるような気がします」

第1回「黄帝は誰のことかと黄帝は言い」で示唆したように、『黄帝内経』の主人公は、恐れ多くも神話的なカリスマ聖王・黄帝である。こうした設定と魂の自由を求めて世俗を超出する

純正タオイズムとの間には溝がある。わたしが直感的にとらえたこの溝にくさびを打ち込み、『黄帝内経』の養生観は、タオイズムのものというよりも、儒家に近いという視点に基盤を与えてくれたのが、2009年の熊野弘子論文「『黄帝内経』における養生と気」（関西大学中国文学会紀要第30号）であった。

原稿を募集しています。

★詳細は»» [こちら](#)

★メディカル求人天国

鍼灸マッサージ師・柔道整復師の求人情報は»» [こちら](#)

■ヒューマンワールドのメールマガジン「あはきワールド」は毎週水曜日に配信しています。

★配信登録は»» [こちら](#)

『黄帝内経』は養生の書にあらず、というわたしの見解は前回は参照願いたい。だからといって、『黄帝内経』に養生観、養生術が盛り込まれていることを否定するものではない。熊野は、この養生観を抽出して分析し、従来、定説であった『黄帝内経』道家影響説をあつけなく崩してしまった。確かに、「恬憺虚無」など精神修養の道家的キャッチフレーズに目を眩まされずに、『黄帝内経』と『老子』『荘子』とを比較するならば、両者の違いは歴然としている。

片や健康の保持と疾病の予防を第一義とし、診断、治療について記す人為の医書であり、片や単独者、自由人の無為自然の哲学書である。熊野の言い分は、歯切れが良い。『老子』には、「『黄帝内経』や中国医学との思想的関連が窺えるところは、皆無ではないかもしれないが、直接的関連は多いようには思われない」「肉体を養う意味での養生は否定されている」。『荘子』の思想も、「身体を養う養生は切り捨てている」「『荘子』には気に何らかの人為的なはたらきかけを行うという思想がない」。

◇熊野論文の成果—『内経』養生観は儒家の思想

使われている文献は目新しいものではない。だれもが読んできた『老子』『荘子』である。その中から、熊野は立論の根拠の一つとして、しばしば話題になる『荘子』刻意篇の導引術批判を挙げている。

「吹响（すいく）呼吸。吐故納新（とこのうしん＝古きを吐き新しきを納む）。熊経鳥申（ゆうけいちょうしん）。寿をなすのみ。これ導引の士、形を養うの人、彭祖（ほうそ）寿考の者の好むところなり」

『荘子』の著者荘周先生にとって、究極の生き方は、死生を超克した天地の一気に遊ぶことであり、寿命を延ばすだけの呼吸法、動物の真似をする運動法なんぞ、まさしく小ざかしいことであった。それは、『荘子』を読めばすぐ分かることである。『黄帝内経』と老荘思想との関連を云々する人々は、この二者の違いを真面目に考え抜こうとはしてこなかった。熊野の着眼点は、そこにあったのである。

また熊野は、『老子』第50章が「生を生とするの厚き（あまりにも強く生に執着する）」ことを戒めているとし、それを理由に『老子』は健康法を否定したとしている。さらなる証拠固めのためには、熊野は、第55章を取り上げてよかったはずである。そこには、「生をますをわざわいと曰い、心、気を使うを強と曰う」とあり、「無理に寿命を延ばそうとするのを不吉といい、心が気をしいて動かすのは、無理強いである」とはつきり読める。（ちなみに、「心、気を使うを強という」は、どうみても儒家批判である。強靱な精神力によって気を統御する修養論を掲げ、戦国の世を遊説した孟子の「志は気の師なり」あたりを標的としているとすれば、『老子』という書物の意外な新しさが物語られている。それは次回の題材としよう。）

いっぽう、儒家はどうなのか。熊野が対象とした、『孟子』『荀子』『韓詩外伝』『春秋繁露』などから、ここでは戦国末の荀子について追試してみよう。荀子は、性善説の孟子に対抗して性悪説を唱えた人である。秦帝国成立前の悲惨な戦乱の時代は、荀子に人間性の本質は欲望にまみれた悪であると思ひ詰めさせた。同時に、彼はまた、戦乱を生き抜く力は、この人間性にあるとも考えた。天人合一説のバリエーションとして「天人の分」を主張し、天命に受け身に随順するのではなく、積極的に心身を修養し、自ら運命を切り開く「人為」の思想によって幸福が得られるとしたのである。



内山俊彦著『荀子』（講談社学術文庫）の表紙

「以て気を治め生を養えば、則ち彭祖に後れ、以て身を修め自ら強めれば、則ち名は堯禹（ぎょう、う）に配す。通におるに宜しく、窮に処るによろし。礼はまことに是れなり。凡そ血氣、志意、知慮を用うるに、礼に由れば則ち治通するも、礼に由らざれば則ち勃乱提慢（＝乱れ、たるむ）す。食飲、衣服、居処、動静も、礼に由れば則ち和節するも、礼に由らざれば則ち触陷（＝物に触れて禍に落ちる）して疾を生ず」（『荀子』修身篇）（注1）

礼によって気を治め生を養い、身を修め自らを強健にすれば、寿命は延び国家の統治者としても成功する。そして、礼によれば血氣も通じ、礼によらなければ病が生じる。すべての「人為」は、礼によって統制されるならば、人間性の発露となる、こう考える荀子は、まさしく儒家である。

さて、熊野の結論はこうである。

「儒家文献を考察して明らかになったのは、気を無為自然のままにしておくのではなく、積極的人為的に気を治め、養心、修心して、身を修めるという視点であった。そこには『黄帝内経』の考えと共通する視点がある。すなわち、両者はともに気に対する何らかのはたらきかけを説き、生命・身体の保持と充実を目指すという点で共通している」

◇「人よりも貴きはなし」は儒家思想

もう勝負はついたようである。ここで『黄帝内経』の思想の主導権をさっさと儒家に渡してもよいのだが、せっかくの機会なので、熊野の指摘に

導かれてさらに『荀子』に分け入ってみよう。そうすると、次の文章に出逢う。

「天職既に立ち、天功既になり、形具（そな）わりて神生じ、好悪喜怒哀楽、ここに蔵す。これをこれ天情と謂う。耳目鼻口形態は、各々接するところ有りて相い能くせざるなり。夫れ、是を之、天官と謂う。心、中虚に居りて以て五官を治む。夫れ、是を之、天君と謂う」（天論篇）（注2）

「心なる者は、形の君なり。而うして神明の主なり」（解蔽篇）（注3）

これらは、以下の『黄帝内経』の身体観、生理観にそっくりである。

「五味口に入り、腸胃に蔵さる。味に蔵する所有りて、以て五気を養う、氣和して生じ、津液相い成りて、神乃ち自ずから生ず」（『素問』六節蔵象論）

「人に五蔵有りて五気を化し、以て喜怒悲憂恐を生ず」（『素問』陰陽応象大論篇）

「故によく形と神と俱（とも）にして、ことごとく其の天年を終える」（『素問』上古天真論篇）

「心なる者は、君主の官なり。神明出ずる」（『素問』靈蘭秘典論篇）

『荀子』と『黄帝内経』は、熊野のいう養生観にとどまらず、身体観、生理観においても同じ意識潮流の内にあったとすべきだろう。

ところで、荀子の「天人の分」の説は、天から神格を脱色し、天は人間とは無関係にそれ自体の法則で動いているとするものであった。

「天行常有り、堯（ぎょう）の為に存せず、桀（けつ）の為に亡びず。之に応ずるに治を以てすれば則ち吉、之に応ずるに乱を以てすれば則ち凶。本を強めて用を節すれば、則ち天貧ならしむ能はず。養備わりて動時なれば（＝日常的に生を養い、時節に合わせて運動すれば）、則ち天も病ましむること能はず。…以て天を怨むべからず。其の道然る也。故に天人の分に明なれば、則ち至人と謂うべし」（天論篇）（注4）

これもまた、『黄帝内経』の、天の気は陰陽と五行の法則に則って循環し、人事との相互影響はないとする一方向の天論と同じである。さらに、人間観はどうであろうか。荀子は万物は気であるという『莊子』の気一元論を逆手に取り、戦国ヒューマニズムというべき、人間価値論を唱えている。

「水火には気あるも生なく、草木には生あるも知なく、禽獸には知ある

も義なし。人には気あり、生あり、知あり、亦た且つ義あり。故に最も天下の貴となすなり」（王制篇）

『素問』宝命全形論の次の表現が、これに拠ることは明らかである。

「黄帝問いて曰く。天は覆い地は載せ、万物悉く備わる。人より貴きはなし。人は天地の気を以て生じ、四時の法を以て成る。君王衆庶、盡く形を全うせんと欲す。形の疾病は其の情を知ること莫し。留淫日に深く骨髓に著き、心私(ひそ)かに之を慮う。余は鍼して其の疾病を除かんと欲す。之を爲すは奈何」（注5）

人を、万物の中で最も貴い存在であるとヒューマンかつ傲慢に考えるのは、正真正銘の儒家思想であり、漢代の儒家、董仲舒の『春秋繁露』にも引き継がれる。老荘の道家思想が、人を他のあらゆる生命よりも貴いとすることはあり得ない。「牛馬四足、是を天と謂う。馬の首を落とし（＝馬の面におもがいを付ける）、牛の鼻を穿つ、是を人と謂う」（秋水篇）。『荘子』にとっては、動物は自然であり、人よりも価値が高い。『老子』も、無の混沌を根底に置き、万物の価値を平等とするからである。

熊野の探究と、それを導きの糸とするここまでの検討によって、ひとまず、『黄帝内経』の思想の核心部分を占めているのは、道家ではなく儒家の思想であるとしておこう。では、これで問題は片づいたのだろうか。いな、むしろ熊野論文は新たな疑惑の迷路へとわたしたちを誘うのである。

一つは、『老子』『荘子』自身の矛盾、多層性にかかわる。両書はともに、一人一時の作品ではない。恐らく100年単位で編集作業が行われたであろう。実は、熊野が期待するが如く、おあつらえ向きに「身体を養う養生は切り捨てている」とだけは言えない文章が混じっているのである。

『荘子』には、「なんじの形を勞することなく、なんじの精を揺かすことなくんば、乃ち以て長生すべし。目は見る所なく、耳は聞く所なく、心は知る所なくんば、なんじの神は將に形を守らんとし、形は乃ち長生せん」（在宥篇）と、肉体の長生を肯定する篇がある。『老子』第52章にも、「其の兌（あな）を塞（ふさ）ぎ、其の門を閉ずれば、終身つかれず（兌・門＝目、耳、鼻、口などの感覚器官）」と長生術と解釈できる文章がある。

これらの養生観は、『黄帝内経』と同一である。では、『荘子』刻意篇と在宥篇とが異なるのはいったいなぜなのか。また、後漢時代以降、養生論の観点から『老子』を注釈する『老子河上公注』などが生まれたのはなぜなのか。こうした老荘思想の変容ともいえるべき事態の背景に、どんな時代思潮が流れ、それは『黄帝内経』の成立とどう関係するのか。

他の一つは『黄帝内経』における儒家と道家との関係である。熊野が発

掘し、わたしたちが追試したように、『黄帝内経』が儒家の養生観に依拠した医書であるなら、なぜ『老子』『莊子』が引用されているのか、儒家と道家を抱き合わせるどんな必然的理由があるのか。定説を越える視野へと連れだしてくれた熊野論文も、これら折り重なった疑惑には答えてくれない。

けれど、答えはあるはずである。恐らく、疑惑のそれぞれに個別に答えるのではなく、すべてを束にして一度に開けることのできる鍵がある。それを探すためには、『黄帝内経』の主調音をなす思想は儒家か道家かという、熊野論文もまだ呪縛されている、旧来の方法から脱け出さなければならぬ。そして、戦国から漢代を席卷した、横断的で統合的な思想のミッシングリンクを見つけなければならないのである。

(注 「それによって気を調え生命力を養うなら、7、800歳まで生きたという彭祖よりも長生し、それによって身を修め自らを強健にすれば、名声は伝説の帝王、堯・禹にも並び、政治の要職にある時も、困窮している時も指針を与えてくれるもの。礼こそ、まことにそれである。血気、志意、知慮を働かせる場合、礼によればよく治まり乱れないが、礼によらなければ乱れ調子が狂う。飲食、衣服、居処、動静も、礼によれば調和し節度が保てるが、礼によらなければ災いに遭い病気になってしまうであろう」

(注 「天の職というものが成立し、天の働きが機能すると、人間の肉体が備わりスピリチュアルな精神性が生じ、好悪、喜怒、哀楽がそこに宿される。これを天情（天から受けた感情）という。耳、目、鼻、口、形体は、各々外界に接して固有の働きをするが、互いにその働きを通用することはできない。これを天官（天から授かった器官）という。心はからだの中央の空虚なところにあって、耳、目、鼻、口、形体の五官を統治している。これを天君（天が五官の君たらしめている）という」（天論篇）

(注 「心というものは、形体の君主であり、智慧とスピリチュアルな精神性の主体である」（解蔽篇）

(注 「天の運行には恒常性がある。堯のような聖王がいるから存在し、桀のような暴君がいるから亡びるというものではない。天の運行に対応して治まるやり方をすれば吉であり、乱すやり方をすれば凶である。農業によって国の本を強くし用いるのを節約すれば、天も貧乏にすることはできない。日常的に生を養い、時節に合わせて運動すれば、天も病気にはすることはできない。…だから天を怨んではいけない。人がそうなるようにしているのである。従って、天の道と人の道の区別を悟っている人は、至人といってよいのである」（天論篇）

(注 「黄帝は質問していわれた。天は上から覆いかぶさり、地は下から載せる。天地の気が感応、交合して地上に万物がすべて備わる。その中で、人よりも貴い存在はない。人は天地の気によって誕生し、春夏秋冬の成長収蔵の法則によって成長する。上は君王から下は庶民に至るまで、肉体の寿命を全うしたいと願わない者はいない。しかし、肉体の病はそれと気づかぬうちに進行し、淫邪は留まり日増しに深く骨髓に定着し、内心これを憂うようになる。余は鍼によって病を除こうと願う。どうすればよいか」

 ツイート { 1

★この記事に対するご意見や感想をお寄せください»» [Click Here!](#)

「投稿！あはき動画」募集

週刊『あはきワールド』では、「投稿！あはき動画」を始めました。あはき等に関する動画、たとえば鍼灸の技を磨くための訓練法、新しい刺鍼テクニック、臨床力をアップさせられる実技などの動画を大募集します。投稿を考えてくださる方は[メール](#)でご相談ください。

★参考»»» 投稿！あはき動画 File.1 [ていしんを使った自己治療～手のツボには口にくわえて鍼をする～（岸田美由紀）](#)

[HOME](#)

HUMAN WORLD
ヒューマンワールド

[書籍](#) | [DVD](#) | [CD-R](#) | [セミナー](#) | [お宝市場](#) | [求人天国](#)

[株式会社 ヒューマンワールド](#)

東京都西東京市田無町7-18-4 TEL.042-444-3678 FAX.042-462-1231

Copyright(c) Human World Co.,Ltd. All rights reserved.